

檀国大学・専修大学共同セミナー

日韓関係の現状と将来

目次

| | |
|---|---------------------|
| はしがき | 2 |
| Current Situation and Future Tasks of Korean-Japan Relations | 3 |
| The Basic Conditions for Peaceful Relations between Korea and Japan | 6 |
| 1. Prologue | |
| 2. Two levels of peaceful relations | |
| 3. The peaceful relations in “the level of peoples” | |
| 4. The territorial question | |
| 5. Epilogue | |
| Comment on the Prof. Soga’s report | 11 |
| 「平和のうちに生存する権利」保障の大切さ－檀国大学・交流訪問記－ | 13 |
| 1. はじめに | 4. 共同セミナーのコメント |
| 2. 日本文化の中の「韓国文化」? | 5. おわりに |
| 3. 景福宮・閔妃殉難碑・パゴダ公園 | |
| 居心地の良さと悪さと－私の内なる韓国－ | 20 |
| 日本の「罪」と反日感情 | 23 |
| 儒教文化圏の意味 | 31 |
| 1. はじめに | 3. 特色と内容 |
| 2. 比較の視点 | 4. 地域統合との観点 |
| 竹島（独島）問題の機能的解決へ向けて | 37 |
| 1. はじめに | 4. 問題の背景 |
| 2. 問題の経緯 | 5. 排他的経済水域の境界画定と領有権 |
| 3. 領有権をめぐる両国の主張 | 6. むすび |
| あとがき－曾我英雄所員を偲んで－ | 47 |
| 〈編集後記〉 | 54 |

は し が き

われわれ専修大学社会科学研究所「アジアにおける平和保障」研究グループは、曾我英雄所員を研究代表に、野村浩一、隅野隆徳、古川純、木幡文徳、樋口淳、石村修、矢吹芳洋、岡本篤尚、森川幸一の各所員をメンバーとして、96年6月に発足した。冷戦終結後の日米安保体制見直しの前提とされている朝鮮半島、中国を始めとする東アジア地域における「不安定と不確実性の存在」を批判的に調査・検証し、併せて、日本のアジア諸国に対する戦後補償問題をも踏まえた、アジアにおける総合的な平和保障のあり方を、法律、政治、歴史、思想、教育等の多角的分野から検討することが、その主要な研究目的である。

いわゆる「従軍慰安婦」問題、竹島（独島）問題、日本の北朝鮮食糧支援問題等をめぐり日韓関係が緊張するなかで、われわれは、まずはじめに「近くて遠い国」といわれる韓国との関係をテーマに採り上げることにした。これらの問題を、韓国の研究者と率直に議論してみたいと考え、本学の提携校である檀国大学との共同セミナーを開催することを企画し実現したのが、今回掲載する「日韓関係の現状と将来」と題されたセミナーである。セミナーは、96年12月20日、檀国大学商経学長室で、檀国大学側4名（姜太勲、李光周、黄明水、高承禧の各教授）と本学6名（曾我、古川、木幡、樋口、石村、森川の各所員）が参加して開催され、姜、曾我両代表の基調報告と、古川所員による補足コメントの後、出席者による率直な意見交換が行われた。本号は、同セミナーでの基調報告と補足コメントを中心に、そこでの討論に触発されて帰国後に書かれた訪韓メンバーによる論文、紀行・印象記等をまとめたものである。

セミナー終了後、檀国大学参加者の主催による招待懇親会が催されたが、研究交流を求める側の礼儀として、曾我代表が予め用意されてきた韓国語でのスピーチの甲斐もあってか、懇親会は終始和やかな雰囲気の下に進行し、セミナーでは語り尽くせなかった様々な話題に、一同時間の経つのも忘れるほどであった。われわれの急な申し入れにもかかわらず、セミナーでの報告をお引き受け頂き、玉稿を寄稿して下さった姜先生を始め、セミナーに参加され、われわれを丁重かつ暖かくもてなして下さった檀国大学の諸先生方には、一同感謝の気持ちで一杯である。ここに心より御礼申し上げる。また、セミナーに先立ち、姜先生の御好意により、尹弘老・檀国大学総長と親しくお話する機会を得たことも、われわれにとって大変に有意義であった。ご多忙中にもかかわらず貴重な時間を割いて下さった尹先生に対して、この場を借りて深く御礼申し上げる。

なお、本セミナーの実現は、われわれと檀国大学側との橋渡しをして頂いた檀国大学校文科大学日語日文学科の鄭濬副教授のご尽力なしにはあり得なかったし、曾我代表のスピーチ原稿の韓国語訳をお願いした専修大学法学部客員研究員の崔鐘晩先生のご協力も大きな力となった。また、今回のわれわれの訪韓が、社会科学研究所のグループ研究として初の海外視察研究であったこともあり、事務方との折衝にあたっては、澤野徹前事務局長および村上俊介事務局員（会計担当）のお手を煩わせることしばしばであった。これら諸先生方に対しても、深く感謝申し上げます。次第である。

曾我英雄所員には、5月13日（火）午前4時15分、心筋梗塞のため急逝されました。謹んで哀悼の意を表します（「あとがき」参照）。
（森川幸一）